

会長退任の御挨拶

日本電気株式会社 小林 宏治



皆様のご援助とご協力のおかげで、私も学会長を2年無事に努めさせていただいたわけでありませう。心から厚く御礼申し上げたいと思います。私なりに微力をつくしたつもりですが、もし何らかの成果があったとすれば、それは役員の方のお力だと思ひます。

しかし、これは問題であると私の頭の中から何時も離れないことがあります。それは会員数が増えないうちで、どうも呼びかけ方が少ないんじゃないかというの、私の率直な感じでございます。その点は申し訳ないと思ひしております。しかし、賛助会員は100社を突破しまして、特に若い人たちの会員数が増加しているというふうにも聞いています。これはいい傾向だと思ひます。

先日、東北地区で発表会がありまして私も出席させていただきましたが、この時はほんとに驚きました。非常にたくさんの方々から集まられて活発な討論が行なわれました。特に、この夜のパーティーにも非常に多くの方々に参加され、変な話ですが、食べ物が増えなくなってしまうほど盛況でした。ああいう楽しいパーティーというのは他の学会でもあまり例がないのではないかと思ひます。やはり、いい傾向も出てきているかなと思ひました。後で役員の方々が非常な努力をした結果だということを知りまして、ほんとに皆さんに、特に支部の皆さんに感謝申し上げたいと思ひたのでございます。

なんと申しませう、これからは若い優秀な人たちがオペレーションズ・リサーチ学会の発展の

原動力になってもらいたいものだと思ひしております。次に、この2年間学会長を努めさせていただいて間に私が感じました学会の今後の方向について若干ふれさせていただきたいと思ひます。

このごろ、よく“1980年代は不確実性の時代だ”というようなことがいわれておりますが、いつでも、先のことを“こうだよ”と予測できる時期は1度もなかったように思ひます。

振り返ってみて、“これは自分の考えたとおりであった”と皆さんおっしゃるわけで、これから先のことは不確実であるというのは当り前のことだと思ひます。当り前ですが、次第に不確実なファクターが少しずつ増えてきているということだけは確かです。私自身、事業をやっているものから、これをどうつかもうかということも何時も考えております。

マクロ的に眺めてみますと、重要な問題は、まずエネルギーだと思ひます。もう1つは食糧だと思ひます。食糧だということは、日本におりますとよく解りませんが、後進国へゆきますとすぐ解ります。第3番目は情報だと思ひます。なぜ情報というかという自分もコンピュータだとか通信をやっているから申し上げるわけではありませんが、食糧・エネルギーというものがみんなの目の中に、頭の中に入ってくるのは全部情報の姿で入ってくるからであります。ですから食糧・エネルギーというのは、これは実態でございますが、みんなの目に写る食糧・それからエネルギーという

ものは情報を通して写るわけです。情報というものは見る角度でAとも写れば、Bとも写るわけです。これがかなり錯雑してくるというところから不確実性という言葉を使いたくなるのではないかと思います。

そこで情報というものを、どう扱うかということが非常に大切であると思います。オペレーションズ・リサーチの基本はこの不確実な情報をどのように上手に掴むかということであり、そのために戦争などの面で非常に役に立ったわけです。戦争に役立つものなら、今のような不確実性の時代にもっと役立つはずだと思います。

これは老人のくり言かも知れませんが、そうだとすればなぜ若い人たちがもっと勉強しないのだろうかと思っております。

こういう科学的手法というものをもっと追求し、活用してゆくということが、今後1980年代では大切なことだと思います。私も経営者として、あれやこれやといろいろと考えて、時々突飛もないことを言い出したりしてみんなを困らせてたりしておりますが、振り返ってみますと、基本はすべてそんなに突飛なことではないと思います。

昨年デミングさんとお話をしました時、“私はスタティスティカル・クォリティー・コントロールということ、1929年にシェーワート博士の1926年のペーパーで読みました”，と言いましたら、“それは小林さん早かったですね。しかし、その後の1930年に 出たペーパーを読みましたか”，というので“1929年に読んだ時、あれはまあ数学みたいなものだからもう無縁のものだと思って、その後のものは読んでいません”，と話しますと、“それはまずかったですね。1930年か1931年頃実際面への応用に関するペーパーが出ているんですよ。あれを読んだら、きっとあなたはあの頃応用していたでしょう”。と言っておりました。

ですから品質管理なんかも戦後になって初めて開発されたかのように、事珍しく発表されておりますが、1926年頃からすでに考えられていたわけ

です。

最近、デミングさんが、“もうアメリカはダメで、あれだけのものを開発しながら品質管理を本当にやっているのは日本です。だから私はアメリカ人に品質管理を勉強するには日本へ行け、と言っているんですよ”と言っていました。

オペレーションズ・リサーチという手法についても、実は、私は戦後聞きまして、いやまた難しいことを言っているなあ—と思いました。いちばん最初、日本のものをみますと、まず数式が出てきますので、われわれ、数学に弱いものはちょっと入りにくいし、時には興味も失ってしまいます。ところが、よくオペレーションズ・リサーチを勉強してみると、数式だけじゃない、物の考え方をオペレーションズ・リサーチといっているということが解ったわけです。オペレーションズ・リサーチは今後とも非常に有効な方法でございますので、ぜひこれを次の会長の松田先生に普及することをお願い致しまして、私の退任の弁と致します。どうも有難うございました。

次号予告

特集 社会的合意へのオピニオンテクノロジーの応用

目標設定に関する地域の合意形成	司馬正次
双方向CATVによる地域の合意形成	川畑正大
手段選択における合意形成実験—値ぎめ交渉	武市一幸
住民投票による合意形成	柴田裕作, 他
合意形成の技術と技術革新	松井 好
合意形成システム一覧	丹羽富士雄・司馬正次
防災システムに関する地域の合意	小岩 明

講演 80年代の経営とOR 松田武彦